私の師匠

北海道大学医師会
市立札幌病院

水戸（みと）　泰紀（やすのり）

自分は卒業後に北大神経内科に入局し胆振西部の基幹病院で内科初期研修をさせていただきました。当時の内科は循環器以外の全てを診るため、守備範囲が広く一般外来から内視鏡も含めた検査、救急患者さんの対応まで非常に多忙でした。あの頃はスタンダードだったと思いますが研修医は指導医とペアとなり、二人で患者様をみるシステムでした。そのような状況で素人同然の私を１年間付きっきりで教えてくださったＹ部長先生はとにかく勤勉でとてもよく働く方でした。ただ持病の腰痛があり、夜になると病棟の奥にある看護師休憩用のソファーで横になり腰を伸ばしている姿をよく見かけました。たばこを美味しそうに吸いながらうめき声をあげている先生に、その日入院した患者さんのことを相談するのが日課でした。声をかけると「まあまず一本吸うか？」といつも優しい笑顔でたばこをくださり、一服してからカンファレンスが始まるのが常でした。理学所見の取り方が丁寧で、経験豊富なのに威張ることはなく私の意見もまじめに聴いて指導してくださり、病状把握のため毎朝看護師さんの申し送りに参加しておられました。口酸っぱく言われた「簡単でもいいから毎日カルテを書くこと」はずーっと実践しています。当時は宴会も多かったのですが、先生が好んでいたのはハッカの入ったお酒で、最後はコーヒーにシナモンスティックがついたものを愛飲されてました。ジャズが大好きで自宅に伺うと見たこともないような大きなスピーカーがあり、車を選ぶ時もオーディオの良し悪しが最優先でした。そんな先生に惹かれその後の診療姿勢に影響を及ぼしました。

神経内科の研修では、札幌の南にあった療養所にとてもフランクな上級医のＮ先生がおり、仕事以外でもテニスなどのレジャーや飲み会にと活躍されておられましたが、とにかくたくさん誘っていただきました。呑みすぎて記憶を失い、そのままお家に泊めていただいたことも何度かありました。自然体で科や職種の垣根なく、誰とでも楽しく接することができる姿をとても羨ましく思っておりました。人見知りで付き合いの下手だった私をたくさん誘ってくれて、いつも酔っぱらった時には「みとちゃんに出逢えて嬉しいよ」と言ってくれました。あるときＮ先生がオートバイの大型限定解除の試験中に転倒し鎖骨を骨折したのですが「みとちゃん、助けに来てえ」とお電話をいただき試験場に駆け付けました。びっくりしたのと同時に自分を真っ先に呼んでくれたのがとても嬉しかったのを覚えてます。あっという間に卒後35年で、ほかにもたくさんの魅力的な師匠に出会うことが出来ましたが、いまだに全ての師匠を超えられずにおります。いまの臨床研修制度は短期間でいくつもの科を回って効率的に勉強ができて学問的に優れている点がたくさんあるのだと思いますが、自分はあの頃の違った意味で濃厚な研修を受けられて幸せだったんじゃないかなあと感じております。

北海道医報「会員のひろば」投稿募集

◇情報広報部◇

北海道医報では、「会員のひろば」への投稿を募集しています。記事の内容は自由です。医療情勢、診療で日頃から感じること、趣味・紀行、エッセイ、自己紹介等でも可です。

１．記 事 制 限：１記事あたり１ページ以内。
２．文　字　数：600 ～ 1,000字（１段分）または1,600 ～ 2,000字程度（２段１ページ分）
　　※いずれも写真・図含まず。
３．掲　　載：掲載可否および掲載号は広報委員会にて決定します。
４．原稿送付先：ihou@m.doui.jp
５．問い合わせ先：011-231-7661（情報広報部）